子ども学のひろば

お便り

◇私の「カルチャー・いんふぉ」◇

「左手なるピアノの音色耳朶にありて……」と美智子さまによって2014年に短歌に詠まれたのは舘野泉です。大活躍していた2002年に脳溢血に倒れ、右半身と言葉が不自由になりピアニストとしての生命を奪われたかに思われましたが、リハビリなどを経て左手の演奏家として再起しました。障害を受け入れる過程を「左手のピアニスト～舘野泉 再びつかんだ音楽～」（NHK BSプレミアム、初回放送2005年）で語ります。退院して間もなく、住んでいるフィンランドの首都ヘルシンキ市内のお気に入りのカフェに、奥様の目を盗んで歩いていったときのこと。50メートルの道のりが恐ろしく遠く感じられ、到着するまでに疲れ切り、お茶も飲まずに自宅に帰ってベッドに倒れこんだそうです。

そんな折、バイオリニストの息子ヤンネが何気なく実家のピアノの上に残したある作曲家の左手のピアノ曲を手にした舘野は、左手の演奏に喜びを見いだします。左手用の曲を探すだけでなく、「舘野泉左手の文庫基金」を立ち上げ親しい作曲家たちに曲を委嘱し、左手で演奏する後輩たちに道を開いています。

昨年11月のバースデーコンサートでは、世界初演の「紅の風 ～左手のピアノと金管アンサンブルと打楽器のための」（P.エスカンデ作）を熱演しました。ピアノに歩み寄る姿には、82歳の障害者ではなく、何かユーモラスなものが感じられました。彼は、有名な西欧の作曲家以外に、人生を通してシベリウスら愛するフィンランドの作曲家や南フランスのT.セヴラックの曲を弾き続けています。また彼の著書には音楽への愛があふれています。

（参考：『ひまわりの海』求龍堂2004年、『左手のコンチェルト』佼成出版社2008年、『命の響』集英社2015年）　（AK）

日本保育学会第73回大会のお知らせ
テーマ　保育の“とこしへ”と“うつろい”

会 期：2020年5月16日（土）、17日（日）
会 場：奈良教育大学・なら100年会館
（奈良県奈良市）

今、私たちは、いまだかつてない社会の変革期にいます。AI（人工知能）技術の発達により、産業そのものが大きく変わろうとしています。（略）Society 5.0では、AIと人間の「共存」により、私たちの抱える社会的課題を解決し、私たち一人ひとりが快適に暮らせる人間中心の社会（Society）の実現が目指されます。（略）こうした激動の時代にある今だからこそ、改めて、未来を創る「人間」を育む、「保育」という営みの「不易（とこしへ）」と「流行（うつろい）」を見つめ直したいと思います。保育のこれまでとこれから、日本の保育とアジア、欧米諸国の保育など、多様な観点から「対話」を重ね、子どもたちの今が輝き、生き生きと明日に向かう保育のあり方を、みなで考えたいと願います。

（第73回大会HP実行委員長挨拶より）

◇お茶の水女子大学こども園の実践が本になりました！◇

『思いをつなぐ保育の環境』　全3巻
触れて感じて人とかかわる　0・1歳児クラス編
遊んで感じて自分らしく　2・3歳児クラス編
遊びを広げて学びに変える　4・5歳児クラス編

著：文京区立お茶の水女子大学こども園
発行：中央法規出版　2020年3月1日